

日本人のための日本語教育を考える

阿部 圭一

概要

日本における国語教育は文学的な面に偏っていて、言語技術教育がきわめて手薄である。最初に、大学レベルでの「伝わる文章を書く技術」の教育に関する私見を述べる。アメリカでの同目的の教育と比較して、遅れと不十分さを論じる。次に、小中高大を含めた言語技術教育の必要性を主張した木下是雄と三森ゆりかの論を紹介する。最後に、新井紀子をリーダーとするリーディングスキル・テストで明らかになった、中高生の基本的な「読む力」が不足しているという結果を報告する。

1. 「伝わる文章を書く技術」の教育に関する私見

1.1 文学的な文章と伝わる文章の区別

日本における国語教育は文学的な面に偏っていて、諸外国、特に欧米では普通に行われている小中高大レベルでの言語技術教育がきわめて手薄である。以下では「国語教育」でなく「日本語教育」という言葉を用いる。最初に、私がこれまで主に関心を持ってきた「書く技術」の教育についての意見を述べる。大学レベルの「書く技術」の教育においては、日本はアメリカに比べて30~50年遅れているというのが、私の見解である。

文章を書く教育においても、日本の国語教育は文学的な文章の方向を向いている。というよりも、そもそも文学的な文章を書くことと、他者へ情報（事実と意見¹）をできるだけ正確に伝えることを目的とする文章を書くことが区別されていない。本稿では、後者を「伝わる文章」と略記する。図1に両者の区別を示す。この図では強引な二分法をとっているが、もちろん境界は溶け合っている。

かつては国語の目標は文学鑑賞と日本語の基本運用能力に重点が置かれていた。現在の学習指導要領では、表現・理解・伝達というコミュニケーションの基本能力の育成にかなり重きを置くようになってきている。これは、現行の一つ前（2002年から実施）の学習指導要領からしだいに強化されてきている。ただし、その精神がどれだけ教育現場に浸透しているかには疑問がある。

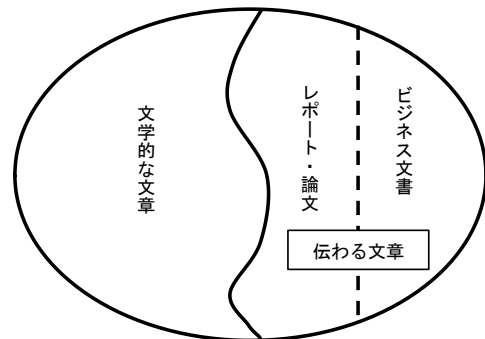


図1 文章の大きな区別

1.2 言語技術教育におけるアメリカとの差

日本の大学において、日本人にたいして日本語文章を書く教育が取り組まれ始めたのは1990年代である。現在では、ほとんどの4年制大学で日本語文

¹ 感情や情緒は除く。

章を書く教育が行われていると思う。ただし、その内容は必ずしも伝わる文章を書く技術の教育とは限らず、文学的な文章を書く訓練との違いを明確にしない場合も多いと考える。理由は、日本語文章を書く教育は主に文系の教員によって担当されることが多く、文系の教員は、理系に比べて伝わる文章を書く訓練をあまり受けていない傾向があるからである。

これに比べて、アメリカの4年制大学では1960年代にすでに 'English Writing' (レポート・論文を中心とした伝わる文章の書き方) が全学生の必修になっていたようである。そのための教科書・参考書として何種類かの本が出版されていた。本が違っても、項目立てはほとんど同じであるから、この時点ですでに、伝わる文章の書き方についてどんなことを教えるべきかについて、大まかな合意ができていたと推測される。

1.3 現在の日本語教育の問題点

1.2で述べたように、今ではほとんどの4年制大学で、日本語の書き方・話し方に関する授業が行われていると思われるが、それらの担当者のあいだで授業方法や授業経験について広く情報交換する統一的な場がないのが現状である。その教員がたまたま属している学会、例えば大学教育学会とか、リメディアル教育学会とか、教育工学会とか、あるいはその教員の専門分野の学会などに分散して発表され、質疑応答を受けている。これは、日本語教育があらゆる専門分野で必要であるため、言うなれば「広く薄い」必要性を有するためである。

日本語教育学会という名の学会は、実はある。ただ、それは留学生にたいする日本語教育について、授業方法や授業経験について情報交換する場なのである。日本人にたいする日本語教育については、それに相当する場は存在しない。そういう事実を把握している人にも、その現状を憂いている人にも私はほとんど出会ったことがない。

一方、社会人にたいする日本語文章の学習については、伝わる文章の書き方に関する自己啓発本が毎月数冊のペースで出版されている。つまり、社会人にとっては、伝わる文章の書き方は個人の能力の充実を図る必須要件の1つである。啓発本においても、各著者は従来出版された本の一部を参照し良い点は取り入れているであろうが、著者間の議論や意図的に知見の蓄積を図ろうとする努力は見られない。しかしながら、社会人向けの自己啓発本で採り上げるべき項目や注意すべき点について、私の評価にある程度耐えうる本に限れば、大まかなところで一致してきていると私は見る。けれども、それをまとめて提示する人は居ないし、またそれを大学の日本語教育担当者に伝える人も居ない。

したがって、私は「日本人のための日本語教育学会」を早急に設立し、かつそこには大学教員だけでなく、産業界からも入会してもらい、両者の意見交換を図る必要があると考える。

2. 言語技術教育の必要性に関する木下是雄と三森ゆりかの主張

この節では、書く技術から視野を広げて、小中高大を通じた積み上げの言語技術教育が必要であるとする木下是雄と三森ゆりかの主張を紹介する。

2.1 言語技術教育の必要性に関する木下是雄の主張

木下は言語技術教育を次のように定義している[2]。

大前提として事実と意見とをシャープに区別したうえで、言語によって

(A) 正確に、客観的に事実をつたえる

(B) 明確に、論理的に意見（考え）を述べる

(C) いきいきと心情をつたえる

訓練をする教育だ。

(A)、(B)の教育は欧米の標準にくらべてはなはだ不十分であるとして、木下は学習院大学初等部・中等部の有志とともに小学校から高等学校までの言語技術教育の学年別配当を考え、教科書を作成している[2,3]。

2.2 言語技術教育の必要性に関する三森ゆりかの主張

三森ゆりかは、欧米では小学校から大学まで積み上げ式に行われている言語技術教育が日本では欠落していることを指摘し、幼稚園児（絵からのクリティカル・リーディング）から社会人までの言語技術教育を20年にわたって実行している[4]。その内容は、次のとおりである。

- ・スキル・トレーニング（対話、物語、要約、説明、報告、記録）
- ・クリティカル・リーディング（絵からの、テキストからの）
- ・作文技術

木下は読解の教育は及第としているが、三森は「日本ではクリティカル・リーディングが教えられていない」と批判している。日本では文学鑑賞の立場から感情について問うことが多いのにたいし、クリティカル・リーディングでは記述されている事実を問う。それは、次の2つの典型的な設問を比較すれば明らかだろう[5]。

- ・ゴンはこのときどのような気持ちだったのでしょうか。（日本）
- ・主人公の〇〇はなぜ△△をしたのでしょうか。本に書いてある事実を根拠にして答えなさい。（スペイン）

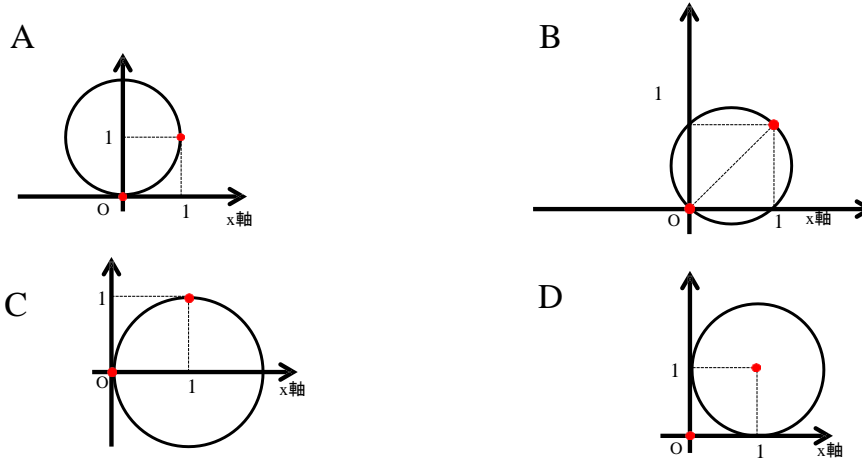
3. 中高生における基本的な読む力の不足

新井紀子をリーダーとするグループは、2011年から「ロボットは東大に入れるか」プロジェクトを実行してきた。目的は、人工知能が得意な点・不得意な点を見出すことである。これは、人工知能によって人間の仕事のかなりの部分が置き換えられていくと予想されることから取り組まれた。2016年度のセンター試験で、東大ロボは全受験者の上位から20%付近、全体の7割近くの大学で合格率80%以上という成績を得た。しかし、ここで成績の伸びは頭打ちになってしまった。それは東大ロボが文章の意味を理解していないで答えているからである。では、なぜそのような東大ロボが受験者の上位20%の位置を占めることができたのか？ 受験者の多くも、文章の意味を理解しないまま解答しているのではないかという疑問が生じた。

そこで、2016年度から中高生の基本的な「読みの能力」（リーディングスキル）を調べるプロジェクトに切り替えた[6]。教科書その他から数行の文章を選び、それに合致する選択肢を選ぶ形式のテストである。一例と、その正答率（中間結果）を図2に示す。

下記の文の内容を表す図として適当なものを、A～Dのうちからすべて選びなさい。

。 原点Oと点(1, 1)を通る円がx軸と接している。



	中1 (145名)	中2 (199名)	中3 (152名)	高1 (181名)	高2 (54名)	高3 (42名)
正答:A	10%	22%	25%	29%	30%	45%

図2 リーディングスキル・テストの問題例とその正答率

付録 「そろばん」(arithmetic) の教育に関する若干の意見

木下是雄は、大学生に教えるべき「読み書きそろばん」の提案のなかで、「そろばん(数値の取り扱い方)」に関しては、

- ・大小のケタのつかみ方
- ・不確かさを含む数値の読み方
- ・統計量の受けとり方

を挙げている[2]。賛成である。大小のケタのつかみ方とは、いわゆるオーダーの概念である。私はこれに関連して、大ざっぱな計算(目の子算)を付け加えたい。できれば暗算でできると良い。例題を挙げる。解答は、正確な値との誤差が±1/2 オーダーまでは許す。その程度の近似値でよい。逆に、オーダーを1以上誤るのは致命的である。

- ・1年は何秒か？

参考文献

[1] 阿部圭一・富永敦子：「伝わる日本語」練習帳，近代科学社，2016
 [2] 木下是雄：木下是雄集3 日本人の言語環境を考える，晶文社，1996
 [3] 言語技術の会編：実践・言語技術入門 上手に書くコツ・話すコツ，朝日選書，1990
 [4] 三森ゆりか：大学生・社会人のための言語技術トレーニング，大修館書店，2013
 [5] 三森ゆりか：外国語で発想するための日本語レッスン，白水社，2006
 [6] 新井紀子・尾崎幸謙：デジタルイゼーション時代に求められる人材育成，NIRA オピニオンペーパー，no.31/2017 July <http://www.nira.or.jp/pdf/opinion31.pdf>